

ドイツのジョーク
—実現しなかった講演「こっそりと指をさす」
(キール大学ヴィンフリート・ウルリヒ名誉教授)を中心に—

竹内 宏

今年購入した私にとって初めてのドイツ車には、ナビゲーションをはじめとして様々な機能を音声認識で指示できる機構を備えていて、メルセデスと名付けられた女性の声とある程度の対話も可能である。そこで一度、「ハイ、メルセデス、何か面白いことを話してよ」と言ってみたところ、「申し訳ありません、私を作ったのはドイツ人なので」と返ってきた。この傑作なジョークは、生真面目なドイツ人には気の利いた冗談など言えない、という、しばしば表明される民族的属性に関する固定観念を前提としている。それを逆手に取って、ドイツ車にこのような自虐的とも言えるフレーズが搭載されているだけに、一層笑えるジョークになっている。

実際にはもちろん、ドイツにも気の利いたジョークはいくらでもある。キール大学名誉教授のヴィンフリート・ウルリヒ (Winfried Ulrich) 氏は長年、ドイツのことば遊びとジョークを研究してきた。2016年10月6日、ウルリヒ教授による講演「こっそりと指をさす (原題: Der verdeckte Fingerzeig)」が鹿児島大学で予定されていたが、直前になって先方の都合でキャンセルされた。この講演は、ドイツのジョークの実例を挙げ、それぞれについてどのようなメカニズムでオチが生じるかを詳細かつ明確に分析・解説するものであり、特にドイツ語に習熟していなくともその面白さがわかるよう、竹内が翻訳に努めたつもりである。まずはこれを読んでいただく。



「こっそりと指をさす」—洗練されたコミュニケーション手段としての「ほのめかし」、ほのめかしを用いたジョークを例にして

1

「こっそりと指をさす」という比喩的表現の「こっそりと」という単語と「指をさす」という単語の結び付きは、それ自体矛盾しているように見えます。「指をさす」というのはまさに何かに向かって指を突き出すことでその対象に注目させることなので、それ自体が「隠されている」場合、つまり他の人の視線に触れないということになると、いったいどうしてその目的が果たされるのでしょうか。何かを指さしている人が、その対象が見えにくいようにその「指さし」を隠す人と同一人物であれば、この人は何をばかなことをしているのか全く理解できない、ということになるのが普

通です。

アメリカの言語学者グライスは、有名になった著書「会話術」の中で、ことばを用いたコミュニケーションでははっきりと明確な表現を心がけるべきだと述べ、文の中の矛盾やつじつまが合わない表現は絶対に避けるよう求めています、さもないと意志の疎通ができなくなるからです。話す時は曖昧さを常に避け、不明確な表現やどちらともとれる表現は使うなと言っています。冒頭の比喻を用いるならば、何をさしているのかできるだけはっきりと指で示しなさいということです。

言語教育に携わる人間こそは、このアドバイスを肝に銘じ、同じことを生徒に伝えなければなりません。しかし皆さん、このアドバイスがどんな場合にも有効だというわけではありません、あらゆる形のコミュニケーションに当てはまるものではないのです。場合によっては、伝えたいことを直接表現するのではなく、間接的にほめかすこと、聞き手に解釈させるようしむけることがよいこともあるのです。このことをジョークの中のちょっとした対話を例にとりて説明しましょう。

「とても楽しかったわよ」、と別れ際に娘の母親が若い夫婦に言った。「でもこの家の周りは何だか草も木もなくて潤いがないわね。－「それは樹木がまだ若いせいですよ」と娘婿がやさしく答えた。「でも今度いらっしゃるときは枝葉がたっぷり木陰を作ってくれますよ」。

このようなジョークが笑えるのは、言いたいことを口に出さないのにでもそれがちゃんと表現されているからです、つまり「今度はそんなにちょくちょく来ないでくださいね、お義母さん！」というわけです。このやりとりのテクニックは「ほめかし」なのです。ほめかしを理解したいならば、はっきりと表現されない言い回しや表現だけでも十分にその意味を受け止めることのできる言語能力を持ってなければなりません。そのつど聞き手あるいは読み手は、ことばの意味に加えてそれに添えられた意味を理解し、相手の表現の不明瞭さと二重の意味に二重の理解力で応じる能力を持たなければならないのです。

ことばの意味とそれに添えられた意味との間の緊張関係はその際、表現と意図との間に矛盾があると受け止められかねないところまで高まる可能性があります。これもまた一つのジョークですが、この小さな芸術を表現した見事にスリリングな会話をご披露しましょう。

エーリヒがエーリカに：「また森を通過して近道をしようよ」と言うとエーリカが「だめよ、今日は時間がないわ」。

このジョークのオチは、「近道」と「時間がない」との間の緊張関係から生まれます。ふつう近道は時間がない時にこそするものだからです。このやりとりが示しているのは、この二人の登場人物の対

話においてはそれまでの経験から、森を通る「近道」が恋人同士の場合むしろ時間がかかる遠回りになるかも知れないということです。つまり、「森を通る近道」という名詞が特別なコンテキスト—あることばに副次的に付随するイメージのことです—、即ち副次的な意味、この場合「誰にも見られないで愛を確かめ合うことができる道」という第二の解釈を与えられるのです。

これは次のように普遍化できるでしょう。即ち、ほとんどの場合コンテキスト=前後関係が、言語表現の曖昧さを帳消しにして意味を明瞭にする作用を持つ（多義性の解消）のに対して、ほのめかしの場合、前後関係によって初めて、意図された多義性（複数の意味）がその効果を発揮する（不明瞭化）、と言えるのです。

コミュニケーション行動としてのほのめかしはつまり、実際の意味での「こっそりと指をさす」ということなのです。それは、見逃したり聞き逃したりすることも十分にあり得る、隠された副次的意味を指示するのです。しかし話し手にとってはまさにこの副次的意味が肝心なものです。

この場合コミュニケーションのレベルは、ほのめかしの力を借りることによって上がります。ほのめかしを用いる側と同様に聞き手または読み手としてこのほのめかしを理解する受け手、この両方の言語使用者が高度に発達した言語能力を備えていることが、意志疎通の前提になるからです。すべてのことばに詳細な注意を払い、それが持ちうる副次的意味と前後関係を考え併せ、さらにことばの間から漏れ出す意味を汲み取り行間を読む、そういった訓練の経験が必要です。

ほのめかしはことば遊びの一形態です。このことはこの単語 *Anspielung* の語源そのものが示しています。Klappenbach & Steinitz の『ドイツ現代語辞典』の *Anspielung* の項にも、「意図的に隠された指示」、「暗示」とあります。また語源をひもといても、ラテン語の „*alludere/allusio*“、古高ドイツ語の „*zuospielunga*“ という単語は、「戯れながら何かに近づいていく」、つまり、言いたいことを直接表現せずに、間接的かつこっそりとそれに近づいていく、という戯れの行動、と解釈できます。

しかし一方で、何かを「遠まわしに言う=原語は、花を通して言う」という決断をするときには、実に様々な動機が考えられます。話し手が聞き手を傷つけないように気遣いながら何かを伝えたい場合もあるでしょう。しかしまた、ことばの背後に隠れた意味によって聞き手に手ひどいダメージを与えようとする場合もあるのです。

ある高級レストランのオーナーが、テーブルに着いた客がちょうどナプキンを首に結ぼうとするのを見て仰天した。彼はウェイターを呼びよせて耳打ちした。「このような振る舞いはうちの店ではふつうではないことをはっきり伝えなさい。ただしそれとなく、だ！」ウェイターはテーブルの客に近づき礼をして言った。「お客様、髭そりですか、調髪でしょうか」。

意図と実際の効果とがいつも一致するとは限りません。とりわけ、表現が場の状況と相手とに相応しくない場合はそうです。

ユダヤ人のルービンシュタイン氏が路上で心臓発作を起こして突然死した。この悪いニュースを哀れなルービンシュタイン夫人にどう伝えるべきか。ラビ（尊師）が寺男を呼んでこの難しい役を託した。「これを夫人に伝えるんだ、ただし如才なくだ！」寺男がルービンシュタイン家のドアをノックすると夫人が寺男を迎え、彼は尋ねた。「こちらはルービンシュタイン未亡人のお宅でしょうか」。—「私がルービンシュタインです、でも未亡人ではありません」。—「左様で、なら賭けますかい」。

「外交的な（如才ない）」話し方とか、「婉曲的な」語りかけ、こういったものが、ほのめかしがその効果をフルに発揮できるコミュニケーションの場であることは明らかです。一方で、ほのめかしが全く繊細さを欠き、粗野で人を傷つけることもあり得るのです。防衛策として聞き手に残された可能性はしばしば、意図的にほのめかしを聞き過ぎるか、あるいはそれを全く理解できなかったかのように振る舞うことだけです。

荘園主のフォン・ヤーゴフは隣村に信じられないほど自分にそっくりの下男がいるのを聞きつけ、その男を呼んだところ啞然としてしまった。その下男は双子かと紛うばかりに自分と瓜二つなのだ。「はてさて」、と荘園主は慇懃無礼に尋ねた。「お母上はこちらで下働きをされていたことがおありかな」—「ちげえやす男爵さま、おらの親父がこちらのとっさまの御者だったんです」。

さてそれでは、ほのめかしはどうやって成立するものなのでしょう。その言語表現の妙技は常に多義性の上に成り立つものですが、他方それはまたかなりヴァリエティに富んでいます。最も単純な形は、特定の意味を持ちながら、違う意味にも解釈できる、いくつかの意味を持つことばを使うことです。

医者が緊急の往診を頼まれた。玄関で迎えたのはすすり泣いている女で、「無駄 *umsonst* でしたわ、先生」。医者が答えて、「ただで *umsonst* はありませんぞ、むなしかった *vergebens*、だけです」。

（このジョークを理解するためには *umsonst* に「無駄に、徒に」と「ただで、無報酬で」の両義があり、一方 *vergebens* は前者の意味だけであることを知っていないといけない：竹内）

このように繊細な感覚の辞書的に記された意味的相違は、私たちの語彙素（意味の相違を作り出す要素としての個々の単語の総体）に既に与えられた構造的な多義性によって可能になるだけではなく、多義性というものは時に、前後関係によっても作り出され得るのです。先ほど引用したエーリヒとエーリカの会話がその例です。（「近道」自体が多義性を持つわけではない：竹内）

つまり次のように普遍化できます。ほとんどの場合、前後関係が言語表現に潜在する多義性を消し去って明確化の作用を持つ（多義性の解消）のに対して、ほのめかしについてはしばしば、前後関係の中で初めて、意図した多義性を働かせることができるということです。

前後関係による多義化の戦略にしても、辞書に記された複数の意味を使用することによる戦略にしても、個々の単語に限定されるものではありません。何かをほのめかすということは、統語的に結びつけられた単語のグループが持つ多義性を用いることによっても可能になります。

休暇旅行中の男が田舎の宿で朝食に小さなスプーン一つばかりの蜂蜜が出たので、「何と美味そう
な」、と女主人に向かって「ミツバチも一匹、飼っておられるのですか？」

豚や牛、ヤギなどの大きな家畜なら一頭単位で飼うことができますが、養蜂家（蜂蜜農家）にとっては群れ全体を単位として飼育しないと意味がありません。このヴァカンス客の、規範からはずれたことば遊びのようなことば遣いは、蜂蜜の量に対する間接的ではありながらもはっきりとした苦情になっているのです。

決まり切った慣用語や言い回しが多義性を持ち、それによってほのめかしの手段として使われることもあります。

若い男が結婚相手に選んだ女の両親に、娘を嫁に欲しいと言った。けれども断られた男は嘆き節で、「ひとり娘の幸せを蹴り飛ばそうとされるのではありますまい？」—「いやいや若者よ、お前さんに自分から立ち去ってほしいのだよ」。

（「蹴り飛ばす」対象が「娘の幸せ」から「若い男」に移される：竹内）

さらには、例えば諺のような文全体が、ほのめかしの中で方向を変えられ／捻じ曲げられて、突然まったく新しい光を当てられて立ち現われることがあります。その際にその諺の昔ながらの解釈が意味の上での背景としてはそのまま保持されます。

「パパ、どうしたらひと財産儲けてお金持ちになれるの」—「正直がいちばん（長く続く=長くかかる）なのだ」。

（動詞 *dauern* には「長く続く=永続性がある」と「時間がかかる」の両義がある：竹内）

この諺は慣用的意味とアクチュアルな意味との間で色を変えるのです。通常は、正直を通しなさい、世間が言うにはそれが最後には賢明な生き方だと証明されるのだ、という戒めです。しかしこの親子の会話での与えられた状況では突然、元々の意味を正反対の意味に変えてしまう辛辣な解釈の可能性

が姿を現わします。お前がずっと正直者を通すなら、金持ちになるのにとっても長くかかるけど、人を騙すことを覚えるなら、すぐになれるぞ、というわけです。

時には、様々な意味的広がりを持つ一つの言語表現そのものが多義性を持つないしは与えられるわけではなく、二重の意味を生むのは言語行為全体のこともあります。

コンサートを終えた女性歌手が、「あらどうかしら、今晚は酷い出来じゃなかったかしら」—「とんでもありません、あなたさまが今日よりできが良かったことはありませんって」。

答えた男はいったいどのような言語行為を行ったのでしょうか。女性歌手の問いを否定したのでしょうか、それとも、「今日の出来は素晴らしかったですよ」と安心させようとしたのでしょうか。あるいは、歌唱の出来栄えに関する歌手の心配の正当性を認めた挙句さらに、あなたはこれほどできが良かったことはない、つまりはずっと出来が悪かったのだ、という酷評を下したのでしょうか。この男のことばをほのめかしと解釈するならば、同時に両方を行ったと言えるでしょう。否定と肯定が意地悪く合体してしまった答えになっています。

人事課長が仮採用期間を終えた新入社員と長い会話を交わしている。「あなたが私に対して返事をする態度と、怖気づかない勇氣は、たいへん立派だと思います。あなたは率直だし、正直です—よってあなたを解雇します！」

この例では、一般的に肯定的な評価を受けている率直さとか正直さという性格が、発言の真っ只中で称賛から叱責へと反転しています。

機知に富むほのめかしのためには、ことばにするときに高度の言語的才覚、いや、名人芸さえ要求されます。その場で突然生まれるひらめき、構造的な多義性を使いこなす繊細さ、あるいは前後関係による多義性を作り出す能力といったものが必要なのです。普段は違う意味で使われている何かに対して新しい名称を与えるという形での言語表現は、ほのめかしの比較的簡単な形ですが、それでさえ機転と当意即妙な能力が要求されるのです。

ペットショップで客が鳥を買おうとしている。店主は熱心にカナリアを薦めている。客はその鳥をじっくりと見、憤激して「どうしたことだ、こいつは脚が片方しかないじゃないか！」—「それがどうしたと仰る」、と店主が答える。「お客さん、歌う鳥をお望みかね、それともダンスをする鳥かね」。

最も創造性豊かなほのめかしは、語彙が持つ辞書的内容及び慣習化し切った文法規範をとっくに離れて、既存のモデルとの類推から、言語表現のレパートリーを新しい語法を生み出すことによって拡

げていくものです。

カトリックの司祭の会議で司祭館の管理人（女性）が慢性的に不足していることが問題になった。「これは我々が太古の職業名を使い続けていることが原因です」と一人が言った。「女性管理人、女性料理長、女性執事などに至っては論外だーそんな職業に就こうと思う人がいるでしょうか。もっと時代に合った、魅力的な名称に変えるべきです。例えば〈女性独身司祭〉などはいかがでしょうか」。

性交渉を控えることを義務付けられている立場の名称としての「独身制 *Zölibat*」が、そこから派生した単語である *Zölibatesse* の基礎をなしていますが、これは現代の新しい職業であるホステス *Hostess*（見本市の会場やホテルで客の世話をすることばに通じた女性）及び *Politesse*（駐車違反取締官の女性）との類推だけでなく、*Mätresse*（昔の貴族の側室・妾）との類推から、フランス語の男性の身分・職業を現わす名詞の女性形を作る接尾辞である *esse* を用いた新造語として作られたものです。しかしその際に、こうして作られた名称である「女性独身司祭」の公的な仕事である家事一般に加えて、非公式の活動としてのセックスの相手という意味が、実にきわどくほめかされているわけです。

2

ほめかしと類似しているのが、「こっそりと指をさす」二つ目の形である「不本意ながらの自己暴露」というものです。

ある大学生と婚約している娘が、司祭に相談に来て言った。「私、ヴィルヘルムとは結婚できないと思うの。だって彼、卑猥な歌をたくさん知ってるんですもの」。司祭が「あなたにそれを歌って聞かせるのですか」ときくと、「いいえそうじゃないんです。口笛で吹く（＝そこいらじゅうにふれまわる：竹内）んです」。

ほめかしと違って、隠されているものを白日にさらして見せる、という二つ目の意味は、自己暴露の場合は話し手が意図したものではありません。こっそりと指をさすことは思わず知らず行われ、しかも気づかれないことが多いのです。そのオチは話しかけられた相手ではなくて話し手自身に向けられ、この人物に良くない光を当て、そのおめでたさと愚かさを暴いて見せるのです。このジョークのオチは言わば後ろ向きなのです。

三人の貴婦人がジュルト島（有名なリゾート）のヌーディストビーチを散歩している。砂丘の向こうでは裸の男が仰向けになって眠っている。まぶしい太陽から目を守るために広げた新聞紙で顔を覆っている。「いったいどなたでしょう」、と一人目の婦人が首をかしげて言う。「夫でないことは確かだわ」。「そうね」、と二人目が相槌を打って「ご主人ではないわね」。そこで三人目が断言して、「私たち

のホテルの殿方のどなたでもないわ」。

話し手は自分自身を裏切って自分の弱点をさらけ出し、思わず知らず滑稽さの中に身をさらします。こうして、自らの発言に隠された二重の意味を見過ごしてしまい、それがどのような結論や推論を導くか、いやまさにそちらの方向にけしかけるのですが、これに気づかない場合は、自分自身を笑い物にしてしまいます。

司祭がミサの間に説教壇に上がり、信者への語りかけを次のことばで始めた。「皆さん、今日は説教はありません、皆さんにお伝えしたいことがあるからです」。

ほのめかしの場合と同様、自己暴露を招く第二の意味は、一つの単語か、単語の集合か、あるいは一つの文の構造的な多義性から現われます。例えば次の例の「Hosenladen」のように。(Ladenには「店」と「ジッパー」の両義がある：竹内)

紳士用衣料品店の入り口の前に張り紙がしてあり、こう書いてある。「家内の病気のため私のHosenladen (ズボン店／ズボンのジッパー：竹内)は4日間閉店します／開けたままです」

決まった言い回しや決まり文句がその意味を曲げられて、その内容がゆらゆらと変化し始めることもあります。

ある未亡人が亡き夫の墓石に次のようなことばを彫らせた。「安らかに眠れ—あなたと私が再会するまで」

しかしこれよりも多いのは、自己暴露を招く第二の意味が多義的な言語表現から生まれるのではなく、言語行動に必要な前提あるいはその帰結から生まれる例です。

結婚したくない娘があんなにたくさんいるって、知ってたかい。」—「いいや、でもおまえはどうして知ってるんだい」—「いや、自分で訊いてみたからさ」。

あるいは、第二の意味が目の前にある現実の解釈を変えようとして成功しないしは失敗したところからも生まれます。

少佐殿が路上で初老の紳士に挨拶している。「やあミュラーさん、しかしあなたはずいぶん変わりましたなあ。前はあんなに背が高くスリムだったじゃないですか。今は背が低くて太っている」—紳士はびっくりして、「私の名前はポールですよ」—「何とまあ！名前まで変えなされたとは」。

現実のバカげた再解釈はしばしば、注意散漫か短絡的な考えをベースとしています、この考えはちよつと見たところでは表面上の説得力はありますが、しかしもう一度見直すとちゃんと最後まで考えていないことが露呈します。

窓ガラスをそろそろまた磨かなければならなくなつた。シューマッハー夫人はあるアイデアを思いつき夫に言った。「ねえパウル、アイロン台を出しましょう。私は内側でそれに乗り、あなたは外でそれに乗って磨きましょう」。二人はそうした。突然玄関ドアのベルが鳴った。シューマッハー夫人はアイロン台から飛び降りて玄関へと階段をかけ下りた。そこには夫が倒れていた。夫人が尋ねて、「パウル、ベルを鳴らしたのはあなたなの」。

その際、それ自体は意味のある発言が、話し手がそれに気づかぬうちに全く逆のナンセンスなものに反転することがあります。

床屋が髪を切り終わった。鏡をかざして尋ねる。「これでいかがですか」一客が言うには、「もう少し長くしてください!」

とりわけ次の例の大学教授は、知的な歪曲によってあまりにもよく知られた彼の注意散漫を演じて見せています。

クルーゲ（「賢人」の意：竹内）教授が言うには、「娘がおめでたがあつたって手紙で知らせてきてね。けど残念ながら男の子か女の子かは書いてないんだよ。だから私は、祖父さんになつたのか祖母さんになつたのかもわからないってわけだ」。

こっそりと指さした先が、いつもおめでたさと愚かさを暴きだすとは限りません。経験した現実の再解釈がクリエイティブかつ明敏に作用することもあります。当たり前になつてしまった事実関係に、驚愕ではあるけれどそれ自体に説得力を含んだ事実関係がとって代わるのです。例えば、頭のおかしい人物の行動でさえ単純なナンセンスだとは限らず、内的な論理に従っていることもあるのです。

三人の男が精神病院の居間に座ってスカート（トランプゲームの一種：竹内）をしている。「王手」、と一人が言ってクラブのジャックを出した。「ちよつと待てよ」ともう一人の男。「いつから飛び将棋にペナルティキックができたんだよ」。

全くのハチャメチャでしょうか。ナンセンス以外の何物でもないでしょうか。決してそんなことはありません。よくよく見てみると、スカートゲームのクラブのジャックと将棋の王手打ち、それにサ

サッカーのペナルティキックの間の関連が誰にでも思い浮かぶでしょう。この三つはそれぞれ、試合／ゲームを決定づける攻撃の状況なのです。ゲームをしている三人のうち一人目はクラブのジャックを切り出し、しかし彼が使う表現は将棋のことばです。二人目はこの一人目が使った比喩的な語り口をそのまま取り上げ、ペナルティキックという表現でそれを続けたのです。そしてウィンクをしながら平平凡凡な話し方を批判しているのです。全く複雑な、いや洗練されたことば遊びではありませんか。

3

ではいったい、こっそりとした指さし、ほのめかし、それに自己暴露を研究すると、ドイツ語教育にとってどんなメリットがあるのでしょうか。

ドイツ語授業の最大の学習目標はご存じの通り、生徒のコミュニケーション能力の育成にあります。それは言語外の能力もですが、しかし第一はやはり言語能力であり、受動的及び能動的な言語能力です。

ほのめかしの理解は疑いなく、授業で伝授し拡充しなければならない基本的能力の一部です。これによって口頭による会話力だけでなく、文学の受容能力も育成されます。なぜなら、間接的なメッセージ、ほのめかしの諸形式は、古典文学及び現代文学で用いられる描写のおなじみの手段であることは言うまでもないことで、それは能力のある読者に「行間を読」み、表に出ない発言をも理解するよう促すのです。

はるかに難しいのは、学習者にほのめかしを作り出すよう仕向けることです。それでも、現実の会話行動の中ではほのめかしが、それも上手なほのめかしが用いられることは稀だとしても、苦勞のし甲斐はあります。少なくとも、それを生み出すための考察、熟考および練習の成果は、言語表現のニュアンス、間接的な表現方法全般に対する学習者の感覚を鋭敏にすることに、大いに役立つはずで、学習者は、自分の言語表現によりよく意識を払い、自らチェックしながら行うようになり、ドイツ語の潜在的表現力をより集中して用いるようになるでしょう。

さらには、自分の発言の意図せざる多義性に対する感覚の鋭敏化も、意義深い授業目標です。そのような鋭敏な感覚は、口頭及び文章表現を自ら批判的にチェックするための前提条件です。必要な場合には、コミュニケーションを客観的に批評するコメント（「私は～...の意味で言っているのです」）とか、コミュニケーションを客観視して訂正する（「こう表現した方が良いかも知れませんね...」）能力へと導くでしょう。自分が本当に言いたいことを言う訓練ができるのです、それ以上でもそれ以下でもない、ちょうどぴったりの発言で、自分に対する不利な推論など決して許さないような話し方を身につけるのです。

考察のための資料としては、この講演のようにほのめかしを用いたジョークが適切でしょう、なぜなら、この種類のテキストは簡にして要を得た形でことばをその「クライマックス」へと導き、多義性と意味の重なりを用いたオチがクライマックスとなって、知的に洗練された可笑しみをを使った実験を行うからです。加えて、ジョークに特有の謎々の性格が、「正解」を求めるよう促すのです。この正解が見つかったかどうか、したがってジョークを正しく理解したかどうかは、自分で判断できます。

しかしジョークは、ことば遊びのテキストの大きなグループ並びに数多い形式の中から取り出した他の多くのテキストを代表する例に過ぎません。これらのテキストは、とりわけ自分でもクリエイティブに模倣してみることを促すそのクリエイティブで実験的な性格ゆえに、すべて授業の資料としてたいへん向いているのです。

だから最後に、全く別の種類のことば遊びを使ったテキストの中のほのめかしの例を挙げておくことにします。

ディディはいつもその気がある。オルガはそれで有名。ウルゼルはもう三回貧乏くじを引いた。ハイディはぜんぜん隠そうとしない。

エルケについてはよくわからない。ペトラは優柔不断。バルバラは黙るばかり。アンドレーアは食傷気味。エリーザベトはあとで数字をチェック。

エーファはそこらじゅうを探している。ウーテはとにかくめんどくさい。ガービは相手がいない。ジルヴィアはそれを最高だと思ってる。マリアンネは発作を起こす。

ナディーネの話題はそれ。エーディトは泣く。ハンネローレはそれを面白がる。エーリカの喜び方は子供みたい。ローニの場合はその間に帽子を投げられる。

カタリーナは説得しなきゃならない。リーアはすぐに来てくれる。ブリギッテにはほんとに驚かされる。アンゲラはカマトト。ヘルガは上手。

タンニャはこわがり。リーザはいつも悲観的。カローラとアンケとハンナの場合はやっても無駄。ザビーネはじっくり時を待つ。ウラの場合はちょっと複雑。イールゼの自制心はすごい。

グレーテルはそんなこと考えない。ヴェーラはそのとき何も考えない。マルゴットにとって事はきつと簡単ではない。

クリステルは自分がどうしたいかわかっている。カミラはそれなしではいられない。グンドゥラはやりすぎ。ニーナはまだおずおずしている。

アリアーネはとにかく拒否する。アレクサンドラはアレクサンドラだ。

ヴローニはそれが好きでたまらない。クラウディアは親の言うことを聞く。

ディディはいつもその気。

読者としてヴォルフ・ヴォンドラチェク（作家、詩人でロック歌手：竹内）のこのテキストを前にすると、このほのめかしをはたして正しく理解できたのか自信を持ってないかもしれませんが、大丈夫、作品のタイトルをちょっと見ればその不安もすぐに解消するでしょう。タイトルは『ラブストーリー』です。

皆さん、ご静聴ありがとうございました。



いかがだろう、ドイツのジョークを十分楽しんでいただけたらうか。

まず、タイトルが秀逸である。「指をさす」という行為と、「こっそりと」という副詞との間の一見したところの矛盾、しかし、ジョークを成立させる「ほのめかし」、「暗示」という言語行為は、まさにその矛盾がもたらす緊張こそが効果を生み出すのだという事情をみごとに表現したタイトルである。

ウルリヒ教授は、ジョークのオチを成立させる暗示が、主として言語の多義性から生まれると論じた上で、ここで取り上げたジョークを：

1. 語の背後に隠れた意味によるもの
2. 与えられた状況により意味が反転するもの
3. 表現と場の状況の落差による効果
4. 辞書に記されているような多義性を用いるもの
5. 統語的結びつきで多義性が生じるもの
6. 対話において答える側の言語行為が結果として重層性を帯びるもの
7. 何気ない発話によって自己を含む人物の愚かさ・ナイーブさが暴露されるもの
8. 一つ一つはナンセンスな発話を重ねることでみごとな効果を発揮するもの

に分けて、鮮やかに例示してくれている。

それにしても、ここに示されている例には、かなり際どい「大人のジョーク」が何と多いことか。「森の近道」に始まり、「男爵と隣村の下男」、「独身女性司祭」、「ジュルト島の3貴婦人」、さらには下品とさえ思える「ズボン屋の主人」と続き、極めつけがラストの「ラブストーリー」。

ここで私も、自らがドイツで目にした（口伝に聞いたものではなく実際に目にした）ものの中から、やや際どいものを披露しておこう。数年前、大港湾都市ハンブルク市内を歩いているとき、自転車タクシーの側面に大きく次のように記されていた。

年間数百人の *Verkehrstote* (*Verkehr* には「交通」の他に「性交」の意味があり、つまりは「交通事故死者」と「性交による死者」が掛けられている：竹内) を数える。そのうちかなりの人たちが、コンドームを着けていなかったのだ。

ウルリヒ教授の分類では4. の典型で、ここで用いられている両義とも、独辞典にも和辞典にも明記されている。性感染症に対する警句を、このように公共交通機関である自転車タクシーの側面に掲げるとは、かなり大胆で、日本では感覚的に少し馴染みにくいと思われる例であった。

さて、本稿の最後を飾るにふさわしく、私が知る限り最も知的で洗練されたジョークの一つで締めたい。2005年4月、ドイツ人聖職者ヨーゼフ・ラッツィンガーが、ベネディクト16世としてローマ教皇に就任した。その後まもなく刊行された週刊誌シュピーゲルの表紙を飾ったのが、以下の言辞である。

ハルツIVが効果を發揮している。今やドイツ人がポーランド人の仕事を引き受けているのだ。

このジョークを理解するにはいささかの説明、というより、かなりの時事的知識が必要である。「ハルツIV」とは、2005年に当時のシュレーダー政権が導入した労働市場改革であり、これの構想に当たったフォルクスワーゲン社の役員であった人物の名が冠せられている。この改革の内容を簡単に説明すると、一定の給付期間を経過した後は失業給付金を大幅に減額し、長期失業者の再就職を促そうというものである。その効果によってドイツ人がポーランド人の仕事を引き受けるとはどういうことか。ドイツにおいて当時ポーランド人が従事していた典型的な職種の一つに、ちょうどシュピーゲル誌のこの号が出たころに旬を迎えていた、白アスパラガス（食にはあまり関心のないドイツ人も白アスパラとなると目の色を変える：竹内）の収穫がある。シュピーゲル誌が言っているのはもちろん、ドイツ人がポーランド人に代わってこの重労働に勤しむようになったということなどではない。ラッツィンガーがその職を引き継いだ人物、つまりベネディクト16世の前の教皇は誰だっただろう。そう、ポーランド人のヨハネ・パウロ2世である。

リベラル左派の高級誌を自任するシュピーゲルの記事は、しばしばあまりに皮肉に満ち、その持って回った文体には閉口させられることがある。しかしこのジョークは、極めて「高コンテクスト的（情報が社会のメンバーに広く共有されていること；この場合、読者が、移民労働者の状況、ハルツ改革の内容、ヨハネ・パウロ2世がポーランド出身であることなどの事情に通じていること）」ながら、白アスパラガスの収穫期と相まってまさに「効果を發揮」した、高級誌の面目躍如、時事ジョークの傑作である。